

研究室から――

〔東北公益文科大学 公益学部〕

教授 遠山 茂樹



この夏、千葉市民文化大学（千葉市文化振興財団主催の生涯学習講座）で、二回ほど講演をおこなう機会を得た。元来、私は人一倍の「あがり症」で、人前で話をするのが大の苦手である。それでもお引き受けしたのは、食えなかつた非常勤講師時代に、同市民大学に何度も講師としてお招きいただき、お世話になったからである。いわば、「ご恩返し」である。それなりに準備を、と思つてはみたものの、これが一向にすすまない。以下は、そんな「牛歩の夏」に脳裏に浮かんだ由無し言。文字どおりの「研究室から」である。

ロスチャイルド家と石南花

ロスチャイルド家といえは、いわずと知れた金融大財閥。一九世紀のヨーロッパ政治否、世界政治を陰で動かした金融界の大立者といつても過言ではない。今年（西暦二〇〇四年）は日露戦争開戦（一九〇四年）からちよ

うど百年ということもあり、巷間ちよつとした日露戦争がブームだが、その日露戦争にもロスチャイルド家は一枚からんでいた。当時、日本政府は戦費調達のためにポンド建て外債を発行するが、その起債に大きな役割を演じていたのがユダヤ人資本家ジェイコブ・シフとロスチャイルド家だったのである。

ところで、ロスチャイルド家というと、私は世界的な大財閥というほかに、もうひとつの顔、いやもうひとつの花を連想する。それは、石南花である。とりわけロンドン分家のライオネル・ネイサンは、この花の熱狂的な愛好者だつた。彼はシティーに本拠を構えるバンカーだつたが、大の園芸好き。パーティー

「深窓の佳人」に思ふ

の席では「銀行家は趣味で、本業は庭師」と宣ふたというから、おそれいる。

サウサンプトン近郊のエクスペリーに広大な地所を構えていたこの「庭師」は、百五十人の人足を動員し、一九一九年から十年あまりの歳月をかけて、世界有数の石南花庭園をつくりあげた。品種改良にも力をそそぎ、みずから作り出した石南花の新品種は約千二百種。日本の石南花では、ことにヤクシマシヤクナゲに魅了されたという。かのシーボルトがヨーロッパに送つたのはツクシシヤクナゲ。いずれにしても一九世紀の西欧人は深山に咲く、この「深窓の佳人」に心を奪われていた。

そういえば、イギリス人の好きな「蔓性植物の女王」クレマチスも、純白のクレマチスの親株は幕末に日本にやってきたブランドハントナー、ロバート・フォーチュンが江戸の植木屋で出会つた大輪のカザグルマだつた。一九世紀後半に西欧を席卷したジャポニスム旋風は、印象派やアール・ヌーヴォーの芸術家たちばかりでなく、園芸界にも押し寄せていたのである。

リスペクタブルな花・石南花

石南花は、ことに一九世紀末のイギリスでは蘭らんとならんで大流行した花だつた。気鋭の庭園史家、というよりは庭園社会史家のチャールズ・クレストリトスンによれば、当時、石南花は社会的品格の表象となつたといふ。この「リスペクタビリティ」という言葉がくせもので、本来の語義は「敬意を払われるに値すること」であるが、同時に、他人の目に自分がいかに映るかという含みもあつた。したがつて、リスペクタビリティは人目につきやすい物質的側面からも規定されたのである。かくして上流階級の衛示ウエイシ的消費も、リスペクタビリティの名で正当化されたといふ次第。

そのリスペクタビリティが、石南花という「オリエンタリズム」を象徴するような花と結びつけられているところが、私にいわせれば、なんと「ヴィクトリアン！」なのだ。当時、新興成金が田舎に土地を購入して邸宅をかまえる際には、その土壌が石南花の栽培に適しているかどうか、前もって確かめるのが常だつたといふ。リスペクタブルな家づくりは石南花から、というわけだ。



真冬に訪れたグロウヴリーの森で（1999年12月）

ところで、既述のライオネルの伯父アルフレッドも、広大な庭をかまえていた。菜園には五十棟もの温室があつたというのだから、驚くほかない。そこに出入りしていた庭師のひとり、が往時をふりかえり、次のように述懐している。「あるとき、こんな話を耳にした。金持ちは敷詰め花壇用植物の目録の多さで、自分の富を誇示するのだという。すなわち、郷土は一万株、準男爵は二万株、伯爵は三万株、公爵は五万株の植物を所有しているというのだ。」そして、この元庭師は、「アルフレッドは四万四百八十八株の植物を所有しているので、伯爵よりもはるかに格が上」と、たいそう満悦だったというのである。

おなじ貴族とはいえ、格の違いは歴然としていた。その違いが植物の多寡で誇示されたというところが面白い。ヴィクトリア朝とはそういう時代だったのか、と思わず膝を打ち、唸ってしまった。ともあれ、貴族たちにしてみればアジアや熱帯地域の異国産植物が植え

込まれた庭は、まさに自らのアイデンティティを確認する「場所」でもあったのだ。

ドュ・カンジユの大辞典を手にして

話しかわるが、夏も盛りの八月七日、私はドュ・カンジユ（一六〇〇〜一八八〇年）の中世ラテン語大辞典（全三巻の復刻版古書）と初めて「対面」した。場所は大学のメディアセンター。人気のない土曜の昼下がりのことだった。重くて大部な当辞典を開いてみても、驚いたのが、その編纂年次。装丁からして、あらかじめその古さは予測できたが、タイトル頁の一番下に記されていたローマ数字MDCCCLXIII（つまり西暦一七六二年）を目にしたときは、さすがに一瞬息をのんだ。一七六二年といえは、まだフランス革命は勃発しておらず、かのナポレオンも誕生していない。

次いで、「森」の項を引き、ドュ・カンジユが十七世紀イングランドの歴史家・文献学者スヘルマン、さらにいえば十三世紀前半の成立と推定される『財務府の黒書』（*Liber Niger Scaccarii*）に依拠しつつ、ラテン語で「森」を意味するフォレスタ（*forest*）と「野獣の棲息地」を意味するフェレスタ（*feresta*）との語源的関連性（OとEの一語違い！）に注目していることを知った。そして、この「知の遺産」を目の前にして、あらためて思った。学問というものはこういうものか、と。

大学もひところとはちがって、実用的でない学問はうつとんじられる傾向にある。要は実社会に出て役に立つかどうかか問題なのであって、そのためにはできるだけ現実の社会的必要に応じた学問・教育を、というわけである。うつした状況では、私の専門であるイ

ギリス中世史」などという分野は、まっ先に「リストラ」の対象になりそうである。それも確かに「現実の問題」としてわからないわけではないが、私は正直に言つと、こうした考え方に諸手を上げて賛成することができない。口幅つたい言い方になるが、学問というもの、刻々と変化する海面の波形をよみとるだけではなく、百年単位のスパンで変化する深層の潮流をさぐる営為でもなければならぬ。ドュ・カンジユは、そう語りかけているように思われた。

研究室に戻り、一息ついた。殺風景な研究室の片隅に置いてある鉢植えのスタージャスマインに水をやりながら聴いたミシェル・プラノンチは、Nさんのお気に入り。軽いヒップホップ調の曲もあって、なかなかだ。もっとも、私にはどうしてもヒップホップを踊ることができなかつた「悲しい過去」があるのだが、それについてはここでは触れない。

遠山 茂樹（とおやま・しげき）

東北公益文科大学 公益学部 教授（総合科目）
宮城県生まれ。早稲田大学教育学部卒。明治大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。千葉大学非常勤講師などを経て、2001年4月より現職。
専門：イギリス中世史（中世イングランドにおける御料林）
著書：『森と庭園の英国史』（文春新書、文藝春秋、2002年）『中世ヨーロッパを生きる』（共著、東京大学出版会、2004年）
イギリス中世の森や兔、庭園や植物探検収集家の歴史といったユニークな研究に従事している。今後はラテン語史料の読解を中心に、研究をすすめていきたいと抱負を語る。